

122. 伊香郡高月町葛籠尾崎・

尾上湖底遺跡出土の 磁鉄鉱について

I

昭和59年3月に実施した尾上湖底遺跡の発掘調査は、従来、分布調査や遺物採集でしかその実態が明らかにされていなかっただけに大きな成果をもたらした。ここではいくつかの新知見のうち、標題について若干の意見を述べてみたい。

II

調査地は、葛籠尾半島の最南端から少し東へと廻り込んだゆるやかな湾部にあたり、高月町と湖北町との町境に近い伊香郡高月町大字片山字寺ヶ浦994番地とその地先(湖中)である。飲料水となる導水管の配置計画にもとづき、湖岸線に直交する形で陸上から湖中にかけて一直線に調査区を設定した。調査箇所的全長は水陸あわせて43mに及び水中部分では32mであった。

III

調査後まもなく、湖中部分の調査域内に多量の鉄鉱石の存在することが判明した。出土位置は、汀線から8mの個所からはじまり16mの地先まで及んでいるが、その前後では微量にしか検出できなかった。

また、その深度は、湖底から浅い個所で-10cm、深いところで-1mも下であり、水面からは-170cm-190cm前後であった。

その大きさもまちまちで、30cm四方大のものを筆頭に、握りこぶし大、親指大、小指大、さらには磁石でないと採集でき難い少粒のものまで包蔵されていた。

鉄鉱石の表面はきらきらと光り、なかには小指大で多面体の結晶を示すものも含まれていた。(写真参照)

一見砂鉄を思わせた砂粒状の鉄粒も、砂鉄のような粒のそろった

調査箇所と分析された鉄鉱石出土地

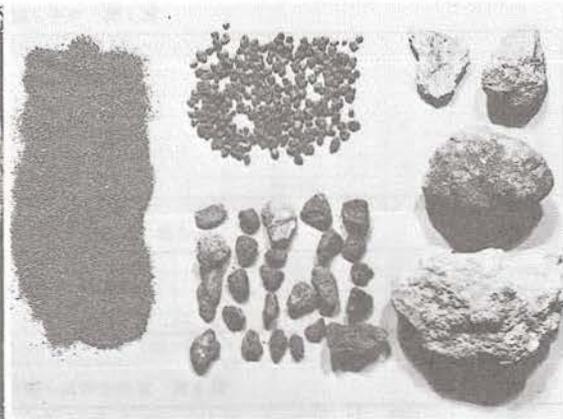
ここにもこの砂粒状のものが、大→中→小と自然にあるいは人工的に破碎されていった過程を思わせるものであった。

周知のように葛籠尾崎の湖底遺跡では縄文早期以降、平安時代までの数千年以上にわたる各種各時代の遺物の出土をみているが、この地で磁鉄鉱の確認をみたのは今回がはじめてであった。

この磁鉄鉱がいかに品質のすぐれたものであるかは



調査地近景



各種磁鉄鉱

湖南で我々が採集した源内峠や平津あるいは野路小野山諸遺跡の鉄鉱石と対比して、いかにも磁石に強力に吸着することや、その表面がこれまた鉄鉱石らしく、黒灰色を呈しかがやいていること、あるいは、その重量比が石材と比べて大変大きいことなどからも予想されよう。さらに詳細なことは、その化学的な分析結果をまたねばなるまい。

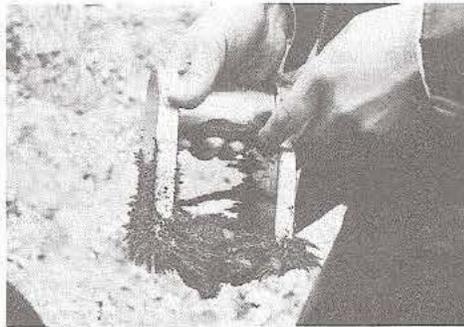
ここでは、葛籠尾崎に近いマキノ町内の鉄鉱石の資料や、湖南のものを紹介しつつ、当遺跡の今後の課題について触れることにする。

IV

湖北で詳細な分析をうけたマキノ鉱山は、湖北の桜で有名な海津大崎の弁天浜東端に位置し、昭和39年～40年にかけて鉱道を設けて採鉱が実施された。

この地域の鉱床は、秩父古生層（粘板岩、チャート、輝緑凝灰岩、石灰岩からなる）に貫入する黒雲母花崗岩の接触交代作用によって生れたものである。一般に接触交代鉱床と呼ばれているが、接触交代作用によって生成された層状のスカルン（脈石鉱物＝マキノでは珪灰鉄鉱、灰鉄輝石、珪灰石、柘榴石、石英、方解石など）帯中に不規則な塊状をなして胚胎しているといわれている。

なお、顕微鏡下では、この地域の鉱石鉱物は大部分磁鉄鉱であるが、稀に赤鉄鉱も認められる場合がある

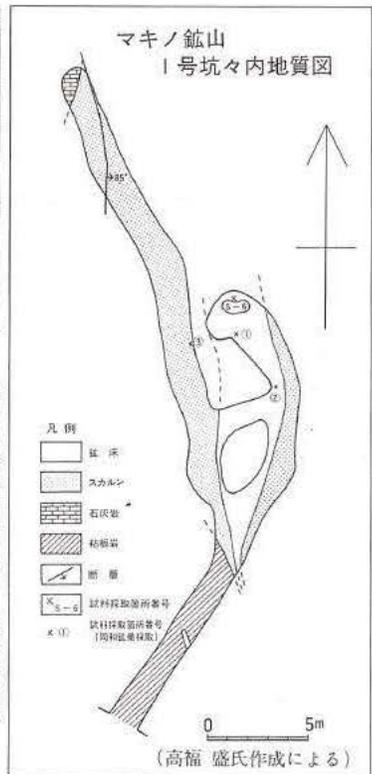


磁石に付着した粒状鉄鉱石



調査箇所遠景、背後は葛籠尾崎

ポンプ小屋の手前水中が鉄鉱石の出土箇所



とのことである。また、化学分析値は別表(第1表)のとおりである。

V

湖南の源内峠遺跡で採集した鉄鉱石では、色調の異なる部位で分析を進めたところ、黒色部はマグネタイト、白色および白緑色部は角閃石、磷酸カルシウムからなり、リン(P)とカルシウム(Ca)が多いことが特徴である。(第2表)

また、野路小野山では、いずれも表面は淡赤褐色を呈する磁鉄鉱で、顕微鏡では大部分淡灰色を呈する磁鉄鉱で占められている。そして、微細な割目沿いに褐

第1表 マキノ鉱山鉄鉱石化学分析値

	Fe	Wt. (%)	FeO	Wt. (%)	Fe ₂ O ₃	Wt. (%)	SiO ₂	Wt. (%)	S	Wt. (%)	P	Wt. (%)	Cu	Wt. (%)	Mn	Wt. (%)	CaO	Wt. (%)
※ S-6	33.84						31.86		tr.		0.053							
※ S-11	18.27						43.50		tr.		0.015							
※ S-13	57.24						6.60		tr.		0.067		含有しない					
※ S-15	38.22						40.03		0.03		0.026							
※※ ①	31.86	20.42			22.92		31.96		0.18		0.12		tr.		2.17		13.31	
※※ ②	28.23	14.73			24.04		33.92		0.12		0.13		tr.		1.79		14.98	
※※ ③	27.50	17.40			20.03		35.10		0.27		0.06		tr.		1.86		15.81	

※ 大阪通産局鉱業課分析

※※ 同和鉱業㈱原鉱業所分析

(高福盛氏の未発表資料による)

第2表 大津市源内峠製鉄遺跡鉄鉱石化学分析値

	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Total
G-M-(1)	14.30	0.00	4.38	7.59	0.11	2.44	40.35	0.63	0.22	29.98	100.00
G-M-(2)	17.88	0.00	5.43	9.42	0.14	3.29	37.08	0.86	0.32	25.58	100.00
G-M-(3)	3.89	0.20	1.02	93.37	0.13	0.56	0.60	0.00	0.00	0.23	100.00

G-M-(1)白色非磁性部分 G-M-(2)白緑色非磁性部分 G-M-(3)強磁性部分。X線分析結果：磁鉄鉱のみ。(昭和58年12月13日、桂 敬、高塚秀治分析による)

第3表 草津市野路小野山製鉄遺跡鉄鉱石化学分析値

	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Total
NO-S	2.82	0.55	1.44	94.41	0.22	0.35	0.20	-	0.00	0.00	99.99

NO-S 鉄鉱石。重さ208.0g

※ Fe₂O₃は全鉄を意味する。(高塚秀治分析による)

鉄鉱化の進んでいるところと、微量のスカルン鉱物（珪酸塩鉱物）や脈石鉱物が認められるという。このこともまた、これら鉄鉱石がどこで産出したものかを考える場合、今後重大なこととなるであろう。（第3表）いずれにせよ、これら分析資料もまだまだ少なく、今後の資料集積をまたねばならないといえる。

VI

砂鉄で著名な中国山地（美作等）でも鉄鉱石製錬が

注意されはじめ、古墳に納めた鉄鉱石や広島県カナク
ロ谷製鉄遺跡出土の鉱石など資料の増加をみている。
県下では、今津町の甲塚古墳群中より昭和59年1月頃
再び製錬滓が発見され、製鉄が五世紀代にさかのぼる
ことを明らかにした。

砂鉄製錬に先だち鉄鉱石製錬が近江を中心に古代に
おいて操業されていたことが定説化するのも間近いこ
とであろう。（丸山竜平）

123. 大型蓋杯の1、2の 問題について

はじめに

近年、県内各地で発掘調査が増加し、中でも湖南地区における開発は急激で緊急調査件数と面積はうなぎ登りの状況である。この中で古墳時代後期の集落跡の調査例が増え、その出土品の中に須恵器の大型蓋杯が相当数含まれていることが判ってきた。県下では野洲川流域で限定されており、集団の性格を限定できるような分布傾向を示している。以下遺物紹介をし、その性格の一部を検討してみたい。

出土遺跡

1. 守山市吉身中遺跡

昭和57年に調査。守山市吉身町に所在する市役所を中心に広がる古墳時代中、後期の集落跡である。大型杯は市教育委員会の調査した箇所1点認められる。口径20.3cm、残存高6.2cm、立ち上がり部高1.7cmを測る。体部外面にナデが残り、内面も横ナデで仕上げる。色調は灰白色である。①

2. 岡遺跡

昭和56年に調査。守山市岡町に所在する古墳時代後期と平安時代末―鎌倉時代にかけての集落跡である。本出土品は4点確認され②は約 $\frac{1}{2}$ の残存ではほぼ全容を知ることができる。口径21.2cm、器高9.5cm、立ち上がり部高1.8cmを測る。外面は胴部下半を叩き、上半をカキ目調整で仕上げる。内面は底部を叩きのあとすり消し、体部は横ナデとする。③は立ち上がりを欠くだけで、全容のわかる杯である。受け部径21.1cm、口径（推定）18.0cm、立ち上がり推定高1.8cmを測る。本品は焼成が不良でひずみがあり、焼きぶくれが認められる。外面底部は静止削りで仕上げる。他は内外面とも横ナデとみられる。④は破片である。口径21.6cm、残高6.1cm、立ち上がり部高1.7cmを測る。内外面とも横ナデにより仕上げる。受部下位はカキ目調整で仕上げる。立ち上がりは短く、胎土、形態が異なる。

3. 下長遺跡

昭和58年に調査。守山市古高町に所在する古墳時代

前、後期の集落跡である。後期の掘立柱建物からなる集落で、本品は溝内から出土した。⑤は蓋で口径20.0cm、器高5.6cmを測り、天井部は回転ヘラ削り、他は横ナデで仕上げる。全体に灰色を呈す。⑥は蓋で、推定口径21.8cm、器高6.1cmを測る。破片であるが天井部をヘラ削り、他を横ナデで仕上げる。⑦は蓋で口径19.4cm、器高（残存）6.0cm、口縁の段の高3.0cmを測る。3点とも灰色、灰白色系の色調を呈す。

4. 吉身南遺跡（高杯⑧）

昭和57年に調査。守山市浮気町に所在する古墳時代後期を中にした集落跡で本品は大型の竪穴住居の検出中に出土したものである。脚筒径6.0cm、器高不明瞭。

5. 吉身北遺跡⑨

昭和56年に調査。守山市梅田町に所在する古墳時代後期の集落跡である。本品は口径22.6cm、器高6.8cm（残存）、立ち上がり部高2.1cmで、受け部下位はカキ目調整、その他は横ナデで仕上げる。

6. その他の遺跡

県内でその出土を確認したのは中主町五条遺跡があるだけで、坏身、坏蓋の二種がある。公表されていないが、現地調査説明会で展示されていた。県外では和歌山県紀伊風土記丘資料館に、岐阜県美濃資料館に坏身が保管されている。その他、生産地での出土例として陶邑古窯址群でも出土例がある。

時期と特徴

市内遺跡出土の坏蓋、坏身の時期については、その例からみて通常の坏身、蓋の時期を大きく異なるものとは考えられないので、陶邑古窯址群の時期編年を参考にしてみるとおよそⅠ型式の終りからⅡ型式の3までの時期に扱えられるものと言えよう。中主の例においても当該時期に入るものと考えられる。形状や手法の特徴として、坏では、底部外面に叩きを施すもの、静止削りを行うもの、カキ目調整を施すものなどがあって、蓋は天井部をヘラ削り、その他は横ナデとしている点で共通点が認められる。

用途と性格をめぐって

およそ6世紀初～中葉にかけて生産遺跡、消費地を通して僅少の生産、消費しかなかったと言う点で、特定の集団が生産者に要望して作らせたというように考

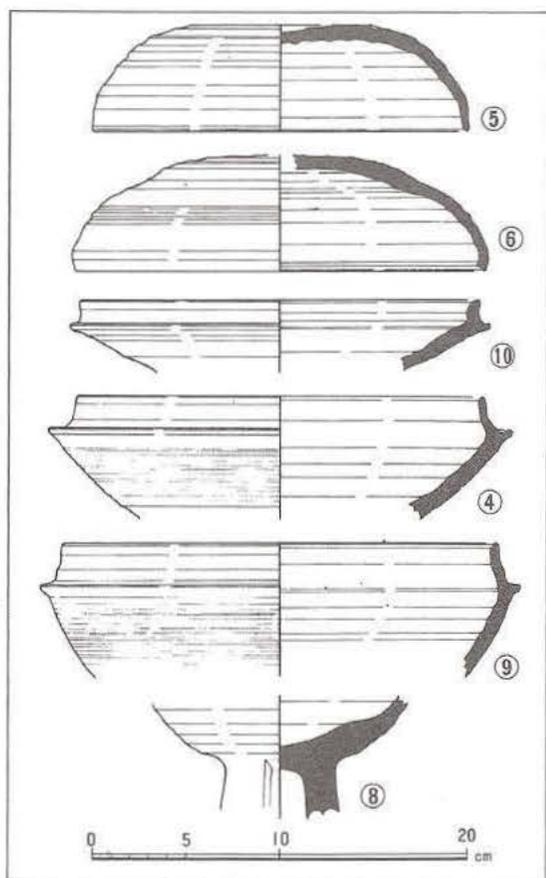


図 1

えられる。この場合の需要の目的が問題となるのであるが、未だ明快な結論を持ちあわせていない。ところが限定された時期の製品であること、集落内での出土、少量生産と需要から、特殊な遺物とみて良いであろう。この場合、出土遺構が重要となる。岡遺跡は竪穴住居内、他の遺跡では竪穴住居を主体とする集落の周辺に穿れた溝内——吉身中、吉身南は掘立柱建物のみの集落内の溝内——下長遺跡のように、古墳時代後期の集落の二種に伴って出土しており、掘立柱建物集落に移行しつつある首長集落に展開した遺物であると考えられる。下長遺跡は布留期にあって既に掘立柱建物を採用し遺跡の埋没した6世紀中葉まで、変わることはない建物である。岡遺跡では竪穴住居に少し遅れて3間5間の大規模な建物が出現し、6世紀中葉にその時期を求めることができ、吉身北遺跡、吉身南遺跡においてもやはり6世紀中葉に掘立柱建物の出現を求めることが可能である。これら出土遺跡の特長が、当該大型環を使用しはじめる頃に掘立柱建物を採用するという点にあり、住居の変化と無関係でないことがうかがわれる。とすると、集落内首長層が求めた須恵器の大型環は、この建物の地鎮のまつりの時などに用いられ

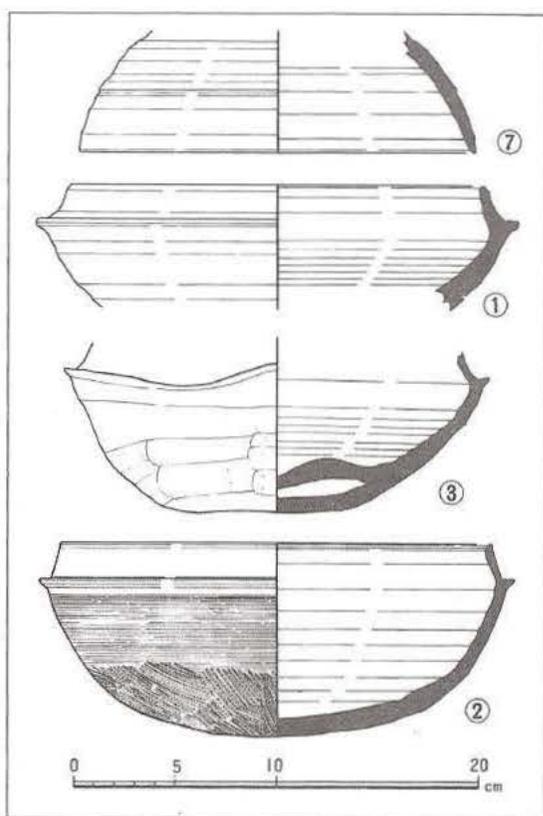


図 2

た祭祀用遺物として考えられる。その用途は地鎮の直会に使用される『飲食儀礼』の器ではなかったかと想像するものである。いわば、私的な所有物でありながら公的用途で使用するため古墳の副葬品には当てられず、集落内で埋没したのであろう。

(山崎秀二)

註及び参考文献

- ① 昭和57年調査 「吉身中遺跡現地説明会資料」 守山市教育委員会。
- ② 守山市岡町字寺前所在。宅地造成の事前調査。古墳時代中、後期の竪穴住居約25棟、掘立柱建物1棟。
- ③ 昭和58年 「下長遺跡現地調査説明会資料」 守山市教育委員会
- ④ 昭和56年 「吉身南遺跡発掘調査報告書」など数回にわたり調査を実施。
- ⑤ 報告書は近刊。
- ⑥ 関市郷土資料館の御教示を得た。
- ⑦ 「陶邑」Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、大阪文化財センター

追記：本遺物が近江の中において野洲川流域に限定しているのが興味深い。この出土の傾向にも性格を決定づける要素があると思われるが、野洲町の丘陵、竜王町の山手に築かれた窟窯と関係深いと思う。別稿で性格を追究してみたい。